

安心してよ。ちよつと遊んだらすぐに捨ててあげるからさ。ああ、自分の好きな人を友達に奪われるって、一体どんな気持ちかなあ。あんたはその時、どんな顔をしてくれるのかなあ。はあああああ。やんつ、想像したら、なんか興奮してきちゃった。でも悪く思わないでよね、今まで友達ごっこしてあげてた分、感謝してほしくくらいなんだから。愚図で鈍間で『かわいそう』ないチゴちゃん♡ それじゃ、分かったらさっさと出ていってくれる？ ほんとは同じ空間にいるだけで不快なのよ。だってあんたは、百歩譲っても赤の他人でしかないんだから。」

『人殺し』

狂ってる。狂ってる狂ってる狂ってる。レモンは絶対に狂ってる。誰かの好きな人を奪うのが楽しい？ 奪われた私の顔を想像して興奮する？ 一体あいつは何を言っている、金持ちだからって何をしても許されると思っているのか。憎い憎い、私の好きな人を奪おうとするレモンが憎い。あの時何も言い返せなかった自分が憎い。というか、そもそもレモンは友達でも何でもない。

い。もう躊躇しない。絶対に渡さない。マロン君をんな奴に奪われてたまるか。私がただただ黙って見ているだけの、ひ弱でかわいそうな女だと思ふな。あいつより早く彼に話しかけて、「ずつと好きでした」って、「あなたを思う気持ちならだれにも負けません。」って、迷わずに告白してやるんだ。彼と幸せになるのは私だ、絶対、絶くつ対負けるもんか。

翌朝、私はいの一番に家を飛び出し、マロン君のクラスの前までやってきた。だいぶ早く着いたからまだ誰もいないはずだけど——あれ？マロン君の声が聞こえない。誰かと話しているみたい。うう、やっぱ緊張してきた。大丈夫、落ち着けイチゴ。あなたは可愛い、あなたは魅力的、あなたならやれる、よし！ 告白するぞ！

「失礼しまー」「この世の誰よりも好きです。こんな私だけど、マロン君、レモンと付き合ってくださいませんか。」

——あつ、あアつ、あアアあアアアアあああつ!! 間に合わなかった! レモンに先越された! 最悪だ。思いつき逃げ出して、私今、すつごくひどい顔してる。瞳から冷や汗が止まらない。ほんと、一人で何してるんだろう。でももうどうでもいいや、何もかもどうでもいい。マロン君のことはすべて忘れよう。楽しかった思い出、むかついた思い出、きゅんとした思い出。けれど、忘れようと思えばするほど、色々な

思ひ出が顔を覗く。ああ、確かスイーツを作つてあげたこともあつたな。彼は甘いものが好物で、口の中いっぱい詰りながら、「美味しい」つて言つてくれたな。本当にあの頃は幸せだった、一人ボツチじゃなかった。今は放課後に遊ぶ友達もお昼と一緒に食べてくれる友達も、休み時間に話しかけてくれる友達もいない。体育の授業はいつも先生とペアを組んで、イベント事は仮病を使つて全て欠席してきた、一人で回る自由行動は辛いから。かなり寂しい生活だが、とつくに慣れたつもりだった。だけど幸せな夢を見たら、人間、手放したくないと思つてしまう。ああああああ!! 嫌だよお、これで終わりなんて。忘れたくない、今すぐ会いたい。私、本当にマロン君が好きっ!

「ねえ、イチゴちゃん……だよね?」

「……え? どうして……?」

間違いない。まごうことなく彼の声だ。けれど、そんなはずはない。なぜなら彼は、レモンに告白されて——「やっぱり、見てたんだね、さっきの。告白されるのは初めてのことだったから、正直すごく嬉しかった。できることなら彼女の気持ちにも応えてあげたいって思つただけど、僕はある意思を持ってここに来たんだ。楽しかったあの頃が忘れられなくて、自分の気持ちに嘘はつけなくて。周りの反対を押し切つて、僕はまたこの場所へ

と戻つてきた。すべては、もう一度君と出会うため。もつともつと、君を知るため。ずっと好きだった。君を思う気持ちならだれにも負けない。こんな勝手にわがままな僕でよければ、君の時間を僕にください。」

「……夢じゃ、ないんだよね? 本当に本当なんだよね?」

「ああ、夢じゃない。本当に本当だ。」

「信じていいんだよね?」

「ああ、君が好きな気持ちに嘘偽りなどない。」

「私っ、私っ、夢が叶っちゃった! マロン君とまたこうして出会えて、話せて、好きつて言つてもらえて。今、すつごくすつごく幸せ。こちらこそ、愚図で鈍重な私ですが、もしも許されるのなら、あなたと同じ時を過ごしたい。ずつとずつと、一緒に居たい。」

それから、私たちは長い間お互いの体を抱き締め続けた。まるで、二人だけが止まったかのように、既に授業が始まつているのも忘れて——

「ねえ、このまま二人で学校サボっちゃわない?」

「……いや、流石に授業に戻るよ。明日は休日だから、二人で思いっきりデートをしよう。今日まで会えなかった分、明日、存分に遊びつくそう。」

確信した。今日この瞬間から私、イチゴは彼と最高の日々を過ごすのだと。もう寂しいと思う暇もないくらい幸せになるのだと。いつまでもこの時間が続いてほしい

と、そう心に願った。

「それで？ 昨日は二人の思いが通じ合って、それで？ 私に對してなにか言うことはないの？ 謝罪はないの？」
私はデートの待ち合わせ場所に向かつていたはず、どうして今レモンに絡まれてるんだらう？ 取り巻きの男達四人で私を囲って、ああ、これが俗にいういじめって奴かあ。

「私にこんな恥ずかしい思いさせて、どうしてあんたみたいな奴が選ばれるのよ！ 愚図で鈍間なあんたを選ぶなんて、あいつの眼は節穴かしら！！ 好きな子と会うためだけに家族と縁を切るとかどうかしてるのよ！ 全く！ 眼だけじゃなく頭までおかしいわ！」

「・・・エえっ！！ 待って、そんなの聞いてない！ ねえ、それってどういう事？ なんで私なんかのためにそこまで——「うっさい！！ 私にくっ、つくな！！（ドンツ）——あっ」

ゴンツツ！！ なぜだか頭の後ろで鈍い音が、あれっ？ なにか景色が歪んで——

「イチゴー？ そこにいるのかー？」

ああ、マロン君の音がする。わざわざここまで探しに来てくれたのかな？ でもおかしいな、視界が真っ暗だ。

「なんか変な音したけど大じよーっ—— なっ、何だよ

これ！！ 一体何が！！」

「チツ、うっさいのが来たわ。さっさと帰りましょう。」

「おい待てお前っ、こんなことして何もなく帰れるわけ——「帰れるのよっ！ 私の父は政治家だから、きつとうまいこと隠すに違いないわ！ 私は何もやっていない！」

「そんなことできる——「できるはずがない、人が死んでるんだものね。なら、私はただの通りすがり。たまたま偶然ここを通りかかって、男が女に暴行しているところを目撃した。」

「——っ！！ てめえふざげやが—— ぐふっ！！」

「ゆつとくけど、こいつらに喧嘩で勝つのは無理だから。あなたの人生、終わったわね。それじゃあね、『人殺し』さん。」

「待っっ：かはっ、ぐうっ！！」

勝てるわけない、勝てるわけないよ。四対一の喧嘩なんて、力的にも、社会的にも。ああ、巻き込んで迷惑かけちゃったな。どうやって謝ろう。もう体が動かない、意識を保つのも限界だあ。だけど、また最後に声が聞けて嬉しかったなあ。どうか彼が、これから幸せな人生を歩んでいけますように。そして一度でいいから、ふとした瞬間に、私のことを思い出してくれたらなあ。そこで私の意識は途切れた。最後は笑顔で、大好きな人を想い浮かべながら——

『イチゴのモンブラン』

「——と、いうわけで、お前は十年前の罪でこれから処刑されるが、最後に何か、言い残すことはあるかね、マロン死刑囚？」

「・・・言い残すこと・・・ハハ、だから何度も言ってるじゃないですか、彼女を殺したのは僕じゃない、先に殴りかかってきたのも向こうだって。——でもそうだなあ、最後にもう一度、『イチゴのモンブラン』が食べたかったかなあ。」

「???? 苺のモンブランなら食べただろう、昨日、最後の晩餐の時に。」

「はは、違いますよ。僕が食べたかったのは苺味のモンブランじゃなくて、イチゴが作ってくれたモンブランです。」

まだ子供の頃、彼女が僕のために作ってくれたスイーツ。本当にあの頃は幸せだった、一人ポツチじゃなかった。今は来る日も来る日も独房の中で一人、一緒に遊ぶ人も食べる人も話しかけてくれる人もいない。寂しかった、一人ポツチの生活は。でももう、それも今日で終わり。

これでやっと彼女に会えるんだと思ったら、少し勇気が湧く。僕は一体、どこで道を誤ったのだろうか。縁を切った家族は一度も面会に来てくれなかったし、最愛の彼女は十年前に目の前で死なせてしまった。あれから僕は、

『不幸』の人生を歩んだ。『かわいそう』な人生を歩んだ。

だけど周りからしてみれば、僕はただの『人殺し』。同情の余地もない、極悪非道な人間である。そんな僕が、最後に『イチゴのモンブラン』を食べたいと願うのは傲慢だろうか。「そんなことないよっ」彼女の優しい声が聞こえたような気がした。待たせたね、イチゴ。今から会いに行くから、二人で思いっきりデートをしよう。今日まで会えなかった分、明日、存分に遊びつくそう。そこで僕の意識は途切れた。最後は笑顔で、大好きな人を想い浮かべながら——